

小屋入りと望郷の念

長崎国際大学研究室留学生

章 潔

今年の長崎くんちの奉納踊りに伝統の丸山町が41年ぶりに踊町として参加される事をお聞きしました。これは、長崎くんちの歴史において、特筆すべき一大事であり、われわれ「日本の祭り」を研究している者にとっては願ってもない朗報でありました。五月、さつそく私は「長崎くんち塾」を通して、丸山町自治会の副会長山口広助さんにお目にかかりました。大変濃厚で熱心な方で、唐突に訪ねた私を温かく受け入れて下さいました。私は山口さんの承諾を得て、早速丸山町の「小屋入り」に参加させていただく事になりました。

六月一日朝七時、私が丸山町に着いた時、山口さんと町内会の方々、シャギリ組の人達は既に着替えを済まされ、町内一周への出発の時でした。

私は、先ずシャギリ組のうしろについて、丸山町を一周しました。シャギリを聞くのは初めてでしたが、清々しい朝の笛の音は、一際、遠くまで響くように思われました。



丸山町小屋入り風景（山口広助氏提供）

八時三十分、丸山町の町バタを持つたハッピ姿の境田さんを先頭に、紋付き袴の世話役、美しい着物姿の長崎検番の芸子衆と地方、そして笛、太鼓のシャギリが整列し、町内の人々の見送りを受け、諏訪神社へ向かいました。行列は思案橋、寺町、紺屋町を通り、市民会館の横を通って、九時二十分諏訪神社に着きました。そこで各踊町は清祓いを受け、十月の本番に向けて、奉納踊りの練習開始を神前に報告されました。

いる町は踊町であることを強く確認でき、なおさら、「くんち」と其の地域に対する愛着と誇りを深めるのでありましょう。しかし、一方では、その同じ理由で、「くんち」に参加できない人々に対して、排除の側面が出てくることも否定できないのではないのでしょうか。「くんち」をイベント、あるいは観光の目玉として見つめる県外からの観光客と同じく、踊町でない長崎市の他の町の人たち、あるいは県外から長崎市に流れ込んでくる人たちにとっては、「くんち」はあくまで、華麗なショーであり、自分達のものではなく「他人の祭り」にすぎないと、疎外感を抱いているかもしれません。それは、そのような「他人の祭り」に、自ら参加する気持がないとはいえ、何か私には考えさせられるものがありました。

私は長崎に三年ほど留学していますが「小屋入り」に参加させて戴いたことによつて、自分の国の事を思い、何んとはなしに外国人として長崎くんちに参加することに疎外感を抱いているようでは、まだまだ長崎に深く馴染んでいない証拠ではないでしょうか。「くんち」は旧暦九月九日が語源だとお聞きしました。其の九月九日は中国の「重陽」の節句であり、中国では重要な行事なのです。其の日、中国の人達は山や、丘、あるいは高い楼に上がり、菊花を浮かべたお酒を飲み、茱萸の実のついた枝を髪にさし、厄除けとする風習があります。日本で丸山町の「小屋入り」に参加して、母国の古風を思い出し、望郷の念に耽るのも祭りの「魔力」ではなからうかと思えました。

長崎くんちは、長崎の人達にとつては、ふるさとの風物詩であり、「ふるさと」そのものであるようです。時代を経て、今も続いているこの祭りは、長崎っ子たちの記憶に深く潜み、事ある毎に心の琴線に触れ、さまざまな思いを呼び起こし続けるのではないのでしょうか。

しかし、少子化・高齢化がどんどん進んでいく日本においては、「長崎くんち」もほかの他都市の祭りと同じく、いろいろな問題を抱えているようです。例えば、市街地のビル化がすすむことによつて、都市のなかにおける近隣を単位とする踊町がその活力を失い、そして、世帯数、人口数の減少のため踊町を辞退する町も少なくないのだそうです。「くんち」を存続、発展させるためには、踊町と踊町ではない町の人達を、「くんち」の感激の輪の中に、いかに引き込めるかが、これからの課題だと感じました。

（観光学専攻）

行列はまるで江戸時代の絵巻のように通りすぎ、私をタイムスリップさせ、昔の長崎のおもかげを偲ばせてくれました。なかでも、私が一番おどろいたのは、思案橋から諏訪神社までの間、丸山町の行列を温かい目で町の人達が見送り、「おめでとう」と声をかけて下さる人々が沢山おられた事でした。現在、日本の地域社会はすでに崩壊してしまつたと言われてきましたが、やはり「祭り」は地域社会の存続と維持にとつて、もつとも重要な事ではなからうかと考えさせられました。

午後の打ち込みにも参加しましたが、シャギリを聞いているうちに、なんとなく私は、望郷の念にかられ、唐の詩人・王維の詩「九月九日・山東の兄弟を思つて」を思い出しました。

原文は「独在异乡为异客、每逢佳节倍思亲。遥知兄弟登高处、遍插茱萸少一人。」という唐詩なのです。その意味は「一人異郷に住み、知る人もいない旅の身は、節句が来るたびに、ひとしお、身内が恋しくなる。さだめし、今ごろ、兄弟たちは山に登つて、皆は頭に茱萸（かわはじかみ）をさしながら、誰か一人足りないねと話合っていることだろう」である。

「小屋入り」に参加させて戴いた私は、このときホームシックになつたのです。これは何故だつたのでしょうか。「くんち」の華麗な傘鉾や、あてやかな出し物は多くの人々を惹きつける磁力だと言われていますが、私は其の中心となる踊町の人達を惹きつけるものは何であろうかと考えました。それは「自分の住んでいる町への愛着と誇り」だと言つても、間違いではないと思えました。

「祭り」とは、もともとと神事であり、参加する人たちに「心のよりどころ」を与え、集団統合の機能をはたすものでありましょう。踊町の人々が、「くんち」に参加することによつて、自分が「長崎っ子」であり、自分の住んで

風信

○八月も二十日と言えば、原爆忌、お盆会も、光源寺のあめやの幽霊供養もすみ、そろそろ「秋まつり」の準備に取りかからねばならぬと長崎の人は言う。

○本会創立以来、全面的な御援助を戴いている十八銀行藤原和人頭取に、今回・前野崎頭取に引き続き、駐長崎ポルトガル名誉領事任命書を六月五日付にて外務省より伝達のあつた事・連絡あり、会員一同心よりお慶び申し上げている。

○先日、国土交通省長崎河川国道事務所より来訪あり、八月は恒例の「道の週間」であり昨年同様、本会でも「道に因んだ行事」を企画されて戴きたいと連絡あり。本年は八月十九日（土）女神大橋より西彼半島全域の国道にかかる橋を中心に回る事にした。コースは、女神大橋、外海町の立橋、大島大橋、新西海橋を回り、各「道の駅」に立ち寄り、地方地方の名物を分けて戴くことにした。

○本会恒例の海外研修会、本年も長崎史談会と共催し、十月二十四日より二十九日まで実施する事にした。今回のコースはザビエル生誕五〇〇年を記念し、ザビエル終焉の地、上川島を中心にマカオ、香港、それに阿片戦争の地、広東まで足を伸ばし「広東十三行」（現博物館）を見学する。参加希望者は本会事務局（上田）まで（電八二二一―一五四〇）

○九州歴史博物館（太宰府市）より九州寺院研究シリーズ20「筑前若宮清水寺」と「九歴研究編集31」を戴いた。同編集には、大野城出土桂根の刻書（杉原敏之氏）、豊前出土銅鏡研究（加藤和歳氏）、太宰府岩尾城の研究（岡寺良氏）、筑前高取焼の研究（副島邦弘氏）、他に資料紹介として塚崎出土土器墨書状痕跡（酒井芳司氏）、いずれも立派な研究論文であつた。

○西日本文化協会（福岡市）より「西日本文化No.421」を寄贈いただいた。今回は福岡県八女地区文化の特集であつた。八女と言えば、岩戸山古墳を中心にした古代文化、八女の人形芝居、八女茶等があり、楽しく読ませて戴いた。

